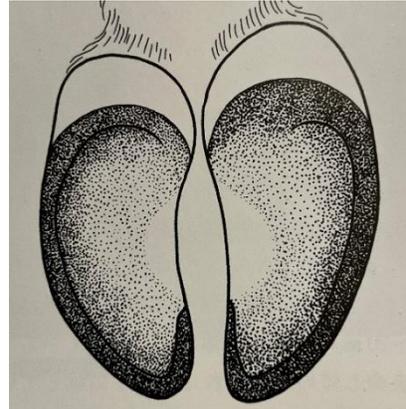
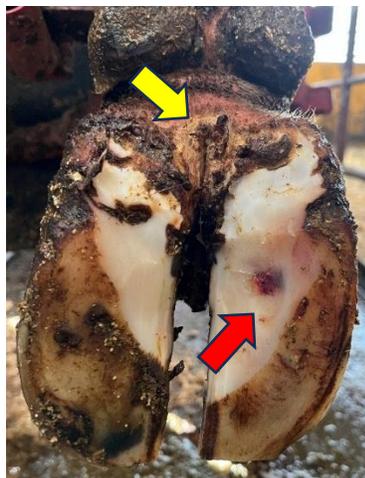




牛は放牧場で生活するのに適した造りをしています。もちろん骨格や蹄もです。蹄底面から見たときには、右のイラストのように、くっきりとした蹄壁と、ぼんやりとした傾斜（土踏まず）のある面とがある様子です。しかしながら、現代の牛はコンクリート床面で過ごすことが多く、下のような



「蹄底潰瘍[↑]」や「趾皮膚炎[↑]」が多発することになっています。そ



れを予防するために、様々な削蹄方法（切り方）が考案されてきました。ドイツもそう、日本の伝統的なものもそうです。今のところ、“師匠から受け継いだ方法”とか、“海外の高名な方の方法”とか、とにかく“個々の削蹄師さん任せ”になっています。我々も、それらの切り方を確認しながら練習してきました



（右写真：負面スタンプ）。ただ、その切り方で良かったかどうかは、跛行・蹄病の種類と頻度のモニターで見るとしかありません。他方、切り方の開発を行っている研究者もいます。昨年行われた国際蹄病学会（イタリア）での出会いもあり、岡山のH獣医師からの提案もあって、スウェーデン大学のテレチェンコ先生から講習をしていただきました（講習内容は後日、護蹄研究会から全国の希望者に配信いたします）。テレチェンコ先生は、1mm厚さの圧力センサーを蹄（屠場材料）の内部に仕掛けて、どの部分にどの程度の圧力が加わるかを測定しています。その際に、床面を草地、ウレタンマット、コンクリート床ではどうなるか？ 削蹄方法を代えるとどうなるか？などを調べています。この講習を見る限り、“放牧地で暮らす牛の蹄の荷重様式を、コンクリート床で再現するためには、放牧地で暮らす牛の蹄底の様子（見た目／外観）とは異なる、論理的な蹄負面が必要である”ようです（詳細は後日）。

農場の牛の蹄の健康増進を図るために、このような信用できそうな理論と、それを踏まえた方法の習得、啓蒙、およびモニターを積極的に行いたい。そのために削蹄を科学の領域に押し上げたい…これが私の年頭の所感でございます。